



ロベルト酒井の

南十字の 空から

平成 25 年度 ブラジル通信

No. 3 9月14日～9月16日

発行者 豊橋市教育委員会

酒井 憲一

パラナ州教育局長表敬訪問

ドタキャンと多忙な局長

9月16日(月)11:30にパラナ州教育局長フラビオ氏にお会いすることができました。実はブラジル到着直後、「今日の午後5時から教育局長と会うことになりました。」と言われていたのですが、30分前に「急な用事ができてキャンセルです。」

と言われました。ブラジルではよくあることだと聞いていたので、あまり気にせず翌日からの仕事に臨みましたが、実際は、局長はパラナ州副知事を兼務しており、多忙ということなので納得できました。

ジェントルマン！ フラビオ局長

フラビオ局長は、写真を見てわかるとおり、温厚で紳士的。ブラジル人には珍しくゆっくり話され、私を包み込んでくれるような方でした。私が豊橋からのお土産を渡すと、すぐに開いて、特に豊橋の風景を切り絵にして表した風呂敷のようなものを気に入り、「これをテーブルに広げて話をしましょう。」と言ってくださいました。写真にあるとおり、テーブルに紺色の風呂敷が広げられているのがわかるでしょう。なお、フラビオ局長からもお土産をいただきました。

豊橋の教育支援事業に賛同！

早速、私のミッションについて申し上げると、「昨年、宮本氏が訪問されたことをよく覚えている。パラナ州としては全面的に協力したい。」と言われました。その内容は、前号のエゼキエル課長との懇談内容と同じですが、興味深かったのが、市立学校から州立学校への連携については非常に重要だと思うので、将来的に州立学校(小6～中3)も市立にして、義務教育期間の連携を密にして、内容を充実させたいとのことでした。また、日本の義務教育制度は素晴らしいので、参考にしたいとのことでした。

避難訓練

ここでも、「特別ミッション？」である避難訓練が話題になりました。そして「日本の進んだ安全教育の一環である『避難訓練』について学びたい。市内の各市の全教育長、消防署、地域の安全を守るボランティアを集めるので、そこで、日本の避難訓練についてレクチャーしてほしい。」と要請されました。私は内心、大きすぎる仕事だと思いましたが、少しでもパラナ州の教育に貢献できるなら引き受けました。11月末に再びクリチバ市を訪れるので、その時に行くことになりました。



豊橋の「風呂敷」を囲んで懇談

大変充実した懇談で、フラビオ局長の紳士的な対応に感動しました。この模様については、以下のアドレスに写真が載っていますので、よければご覧ください。なお、毎日更新されるので早めにアクセス

してください。 <http://www.flickr.com/photos/flavioarns>

日本語学校訪問

話題が前後しますが、9月13日（金）にクリチバ市にある2つの日本語学校を訪問しました。ミッション⑦の遂行のため、各日本語学校を訪問し、そのノウハウをパラナヴァイ日本語学校の再建に生かそうという目的です。

日伯文化援護協会の日本語学校と「Tomodachi」という民間の日本語学校を訪問しました。意外だったのは「Tomodachi」は日本語だけでなく中国語のコースもあり、幅広くアジアの言語を学ぶことができる学校だったことです。

両校に共通するのは、日系人だけでなくブラジル人の方でもよいので、幅広く多くの方に日本語を学んでもらいたいという願いが強いことです。つまり、「日系人以外の人に日本語学校に来てもらうのはおかしい。日本語は日系人のみが継承するもの。」という古い考えに固執し、経営が困難な学校があると聞いています。パラナヴァイの日本語学校もその一つです。この考えが間違っているとは思いませんが、日本語学校の存続を目指すなら、門戸を開くことも手段の一つと思いました。



日伯文化援護協会での教材の説明

帰国した若者への支援

A君 男 26歳

4歳で来日。千葉県で今年まで過ごす。日本の学校に通う。家庭内はポ語。日本の専門学校で整備士の資格を取得し、自動車工場で働く。今年帰国。現在、夜間の大学に学びながら就職活動中。

B君 男 19歳

日本生まれで、中学校卒業まで名古屋市の日本の学校に通う。家庭内はポ語。卒業後、帰国したが1年間、高校入学を待つ。その後入学したが1年留年し、現在高校3年生。生活様式や考え方は日本人。



帰国者家族と共に

9月16日（月）に2人の帰国者と面談しました。

A君は母国で働きたいという夢をもって渡伯しましたが、就職先が決まりません。通訳ができるほどの語学力ですが、現在ブラジルでは通訳が足りている状況です。今は貯金を使いながら大学の学費を払っています。彼を見かねて、私の通訳の坂本さんが様々な支援先を教えてくださいました。

このような坂本さんの動きができる支援システム（組織）の構築が早急に必要だと感じました。

B君は、クリチバ市郊外の田舎町に来て、友達がいなくて、外に出られないという状況でした。またFやRの発音が区別できず、学校でバカにされ、しだいに躁うつ病になり、頭を壁に打ちつける日々が続きました。

そんな中、日本から先生が来る（私のこと）ということで、彼だけでなく家族は大変喜んでくださり、大歓迎でした。日本のことを日本語で話せる。こんなあたり前のことが彼の心を癒したようです。

帰国者支援というと「子ども」をイメージしますが、若者を含めた幅広い支援が必要と感じました。

ロベルト酒井の「こんな時どうスルー？」

前号の答えは③です。みなさんが、海外からのお土産でいろいろなものをいただくとありますが、紙幣をもらう（見せてもらう）ことはあまりないでしょう。つまり、日本語学校の生徒もマンガや手ぬぐいはよく見ているそうです。そこで私は、紙幣を見せました。10年ほど前にEUの研究授業をした際、導入でイギリスのポンド紙幣とユーロ紙幣を見せたところ、子どもたちは興味をひきました。それを思い出し、紙幣を見せて興味を引いたということです。

では、第3問。帰国者B君の家庭を訪問した際、お土産をいただきました。その際、私はどうしたでしょう？

- ① カバンにしまった ② すぐを開けた ③ テーブルの上に置いた 答えは次号で！